

俳句雑誌

空

空

令和4年7月20日発行

第20巻1号

通巻第102号



2022・7

SORA 102号

焦燥

柴田佐知子

段取りのずれゆく地球鳥曇り

衰へぬ疫病家を出ぬ素足

振り下ろす棍棒白シャツと陽射し

まぶしくて噴水空に碎かるる

戦乱に巻き込まれたる夏の蝶

ジャーキーを裂くに犬歯や草いきれ

少年の焦燥ひまはりを憎む

―「WEP俳句通信」128号より―

蛇となり白波越ゆる夏芝居

言ひとつのる眼の恐ろしき青葉の夜

金魚売乾ききつたる道を来る

立ちつくし土蔵を出でぬ竹婦人

浮人形子が寢床まで連れてゆく



福岡 高倉 和子

東京 中田 みなみ

風雪のなすがままなり獣道

枯草の香の親しさに膝を折る

薄氷に音の変はれる小川かな

冬青空杖よ宜敷くたのみます

煤逃げの銭湯に頭の揃ひたる

神妙に柁挿せる漢かな

注連飾雨に打たれて太りけり

払ひたる厄が渦巻く闇のなか

腕すこし重なり合うて日向ぼこ

うどん屋を出て新しき寒さかな

似たやうな顔となりゆくちゃんこ鍋

髪梳くや一夜に消えし嬰粟の雛

着ぶくれて防災訓練始まり

神鈴を振る帯揚げもさくら色

毛布より猫と一緒に顔を出す

来し方を花にも謝して花菀

九十七才

長崎 荒井 千佐代

埼玉 服部 早苗

スタツカート利かせて弾きぬ春隣

ガジュマルの根を見て飽かず十二月

ロザリオを入れし壺山眠る

妖精が楽を奏つる滝つらら

石尊搔く村人はみな隠れ耶蘇

凍星を入れ金継ぎの抹茶碗

波止に干す荒布かき寄せ棺下ろす

真つ直ぐをまつつぐと言ひ目貼する

鱈東風村に三年医師をらず

数へ日やヨガのポーズの猫とゐる

病む人へ足を汚して芹を摘む

青空を片寄せ沼の初氷

白鍵に黒鍵の影凍返る

風呂吹きや猫舌の子も知命過ぐ

礫の主の腰布や春の雪

現世を寄せず離さず雪囲



北九州 深川淑枝

父の忌もきのふも遠し山に雪

朝よりの時雨豆煮る火を細め

接種後のうつつ狐火遠見ゆる

神座へ走り根の階笹子鳴く

依代のまるき葺石椿咲く

梢木に火まはりて山の夜の匂ふ

冬ざれや蒸籠ひたせる使ひ川

眠る山より墓石を切り出せる

広島 戸栗末廣

十二月八日押し合ふ海と川

島出づる棺に百のゆりかもめ

山墓に雨きらきらと冬至かな

この辺り昔は海や年明くる

一木の天辺といふ寒さかな

大寒の山へ口笛鳴らしけり

ものごころは母に授かり手毬唄

枯れきらぬ音も混じりて焚かれけり

福岡 角野良生

一切の力抜きたる破芭蕉

菱採りの閑かな水音あるばかり

猪鍋や修験なごりの柚子胡椒

冬濤に太初の白さありにけり

冬の波力余さず崩れけり

出入り勝手の猪垣となりにけり

冬ざれと言ふ明るさや雑木山

駅毎に積雪深くなり母郷



福岡 栗原京子

捕虜のごと働いてゐる年の暮
 宝船撃沈さるることもなし
 寒雀一樹に陣屋構へをり
 水鳥の動けば同心円の波
 波頭押さへてゐたる浮寝鳥

粕屋 吉田 菫

少年の膝小僧あり雛の間
 摘草の籠置く去年と同じ畦
 穴出でし蛇に大きな雨の粒
 牛角力敵もろともに倒れ込む
 夕焼の色褪するまで母を待つ

福岡 永淵恵子

白鳥の着水すこしもつれけり
 水仙は一重がよけれまなぶたも
 ここもまた限界集落雪しんしん
 春隣地べたに書いてスコア表
 豆を撒く使はぬままの子の部屋も

直方 曾根富久恵

ひとところ煙の黒き焚火かな
 湯ざめして結婚線の薄れけり
 年忘れ余興はいつも同じもの
 抜け道の急な階段初詣
 物置となりし絵馬堂冬ぬくし

北九州 兒玉充代

つらつらと顔を洗ひぬ今朝の春
 胃袋のたしかなあり処節料理
 走り出すやうに湯の沸く女正月
 流されぬことが身上浮寝鳥
 寒林のしづけさに鳥鳴きにけり

大宰府 山本則男

菅公の謫居の寺の寒雀
 天平の音色正しき除夜の鐘
 弓始的の音より明けて来し
 末社より始まつてゐる年用意
 おだやかな花びら餅のひとつ日あり

千葉 原友子

寒の土深紅なる芽を覗かする
 裸木のまへ三脚の脚細し
 麻酔より覚めゆくやうにしづり雪
 雪折れの葱を甘しと帰郷の子
 寒肥打つ小さく短く土のこゑ

熊本 松田明子

天地を埋め尽くしたる鶴の声
 走り根を踏み菰巻を締め上げる
 百畳を素足の過る冬安居
 桶に満つ沈めの真水浜どんど
 初夢やほつとするやら惜しいやら



広島 星加鷹彦

絵踏めく一步の深し今朝の雪

菓子の名に藩の石高梅早し

ゆるゆるとうたふ地唄や炬燵舟

童等の声の高さにどんどの火

詫状になりてしまひし賀状かな

直方 石橋幾代

誘はれてためらつてゐる大焚火

寒波来る納骨堂の暗がりへ

餅筵上がり框にまで広く

春の猫庭ひと回りして消ゆる

父の指示出て風の糸強く引く

北九州 河原敬子

輪飾や散らかしてゐる机にも

緑濃きところを子へと七日粥

屠蘇器しまふ螺鈿の花に綿当てて

小雨など弾き飛ばせりどんどの火

前列で楽しむオペラ女正月

福岡 あさなが捷

四日かな抱かれぬ猫とゐる日向

いつまでも足うらにある踏絵かな

御降嫁に従きて来たりし雛道具

ほとほと源氏訪ふ春の闇

忘るる頃に応ふる母や春炬燵

大野城 森田明成

小春日の人よく見ゆる田舎かな

麦の芽の列のゆがみて乱れなし

舞ふほどに憑かれてゆきぬ里神楽

虎落笛都会に鎮守細りゆく

住み馴れて程よき暮し冬うらら

長崎 松尾龍之介

消火器の直立不動去年今年

早退の子に裏門の石露咲けり

日めくりの一日一句はじまりぬ

七日はや鰯の開きのひんがら目

あけばのとたそがれに二度春の色

北九州 坂口学

甌穴をまたぐ石橋冬の蝶

杣人の犬も寄り来る大櫓火

櫓の火を見てをれば火となる思ひ

鶏の羽をむしるも年用意

星空へ焚火の爆ずる宴かな

大阪 井上和子

百の風平城京に落ちて来る

顔伏せて湯気の湿りを雑煮食ぶ

ふるさとの訛聞きたく初電話

お手付の掌の重なれる歌加留多

三日はや赤き実零る床豊



岡垣 田中とし江

大阪 田岡 千章

船酔ひす鴨の水面を見てをれば
春立つや毘沙門堂に槌の音
ぶらんこを落ちし児へ姉駆け寄りぬ
草萌や大きな保険証もらふ
花の丈揃ひて朝のヒヤシンス

下校の児冬日溜りでじゃんけんぼん
騙されてやるも一手や猩猩木
紙懷炉冷むる夕べのことは嘘
裸木のをとこ姿でありにけり
古曆暗号らしき走り書き

福岡 三井所美智子

兵庫 林 徹也

百年の土間が栖や嫁が君
円満な家系と言はれ小豆粥
住み慣れて淡きつき合ひ冬椿
底冷の床に看取りの敷布団
消灯の病室に聞く虎落笛

大寒や子の持ち来る大吟醸
病室の窓の三尺冬木の芽
春風や退院の荷のかさばりて
ステージは四と兄より鳥雲に
麦青むひと筋紫電滑走路

直方 吉田悦子

長崎 仲里奈央

工場の敷地の端に冬菜畑
くぐる度傾き正す注連飾
宣告の余命超す夫齋粥
長身の夫に任する煤払ひ
風邪籠り本音漏らしてしまひけり

足取りを合はせて歩む小春かな
いくらでも歌つてあげる冬菫
冬薔薇いまだ綺麗と言はれない
雪積もる選ばなかつた人生に
日脚伸ぶ夕餉の時間遅くなり

兵庫 青木朋子

兵庫 大西乃子

もろぶたに餅を並べて長者顔
雑煮餅十個と父の太き声
独楽廻るコンクリートを決るかに
考妣の競うてをらむ歌がるた
人日の畑仕事の空晴れて

どの声も風にさらはれ探梅行
梅探る傘寿の赤きスニーカー
頼杖のときをり外れ日向ぼこ
黒雲の沖にとどまる野水仙
雪だるま笑顔くづれてしまひけり

